
将校少女と机上のジョーカー

とまと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

将校少女と机上のジョーカー

【Nコード】

N4358Z

【作者名】

とまと

【あらすじ】

裏表のある性格の主人公が狡賢い少女と共に変化を遂げていく？
はずの展開不明、学園頭脳戦ゲームコメディを目指しています。
初心者なので取り合えず一ヶ月ほど頑張ってみようと思います。
色々と不備があるとは思いますが、どうか暖かい目で読んでやって下さい。

ブローグ

世の中には二種類の人間がいる、とよくいわれるが、実際のところは違う。

世の中には何千もの種類の人間がいる。

生まれた時から地位や才能に恵まれたものとそうでない者・土壇場で奮い立つものと怖じ気づく者・どんな時でも前向きに考えられるものと後ろ向きな考えを抱いてしまう者。

容姿や知能や運動神経を含めればもつとだろう。人間はそれぞれ色々な長所と短所をもっていて、それによって人生が左右されることもある。

学園生活ともなれば尚更だ。一つの建物の一つの部屋の中で40人弱の人間と最低でも一年間、一日の大半を共に過ごすのだから。その人の人間性やステータスなどが他者に簡単に把握されてしまう。それから友達。

自分と気の合う仲間と過ごす、というのがその人間たちで構成された小グループは、実は幾つかのパターンに分けることができる。

クラスの中でもいい意味で目立つタイプの人間達はそこで集まる事が多い。たまにそんな2つのグループの間で衝突することもあるが。このグループは学園内で一番希少価値の高い存在だ。

次にいつも孤立している、または行動そのものが他人に不快感を与えてしまう人間達。

彼らも慰め合うかのように密集する。たまに同性愛者達が集まっているように見えてしまうこともあるが。

彼らが目立つのは行事の係決めるとき。目立つグループたちに色

々とからかわれて輝くことが多々ある。

そして極普通のグループ。学園内では一番多い筈だ。特にもてはやされるわけでもなく、パシリとして使われることも悪目立ちすることもなく、グループ内で盛り上がるだけの一般的な集団。不良集団もこれに含まれる。

例を挙げるとしたらこれくらいじゃないだろうか。

ここ、私立清藍学園せいらんも例外でない。個性豊かな生徒達が自分に合ったグループの中で学園生活を謳歌していた。ただ一人を除けば。

その例外ー市川いちかわ 優太ゆうたは決まったグループに所属していなかった。一匹狼というわけではない。仲間外れというわけでもない。優太はむしろ友達が多かった。

同じクラスのグループであれば何処にいても快くに受け入れてもらえた。喧嘩をすることもなく、誰かに嫌われることもなく、常人よりも良好な人間関係を築き上げていた。

他人からの評価は『優しい』の一点張り。それより評価が上がることも下がることもなかった。

成績は中の下、運動神経は中の上、容姿は普通。全てが極普通の少年だった。表向きだけは……

優太は平凡な学園生活に不満を抱いていた。何のハプニングもなく、これといって目立つこともない。只々、平凡至極な毎日にウンザリしていた。

彼は自分が嫌いだった。努力をしても一番になれない、得意なことがあっても他人に必ず追い抜かれてしまう。そんな自分が嫌いだった。

自己嫌悪だけなら普通だ。だが優太はそれに加えて自分の本心を隠していた。

他人に本当の自分を知られたくないから。自分の歪んだ考え方を見せたくないから。

彼は嘘で自分を塗り固めて、仮の性格を作り上げた。

そんな彼に転機が訪れたのはある年の12月10日のことだった。

第一話

よっ、読者様方。市川 優太 だ。

いきなりで悪いんだけど、この話は俺から見た世界を描いてる。物語も俺中心だ。つまりは、一人称ってわけだな。

プロローグは三人称だったんだが、ここからは俺が担当するらしい。

わかりづれえ、って思うかもしれないが慣れてくれ。すまん。

閑話休題

「市川ってホント彼女できないよなあ。こんなに優しいのに」
1年B組のクラス内で 海原 うなばら 航 わたるは俺に向かってそう言った。

「あんなあ航、女子が優しいだけの男子に心を奪われるわけないだろ」

「わかんねえぞ。心が病んでる人にとって優しさは一番の救いだからな」

「そうかなあ？」

航、優しさはたまに人を傷つけるんだ。お前にはわからないだろうが。

海原 航、俺と同じ水泳部に所属してる最強人間だ。

成績はいつも学年トップだ。顔も白人みたいな感じで華がある。しかも地毛の色が茶色。

そのクセして純日本人っていうんだから凄いよ。

それからとにかく筋肉がヤバイ。二日に一遍、自主的に筋トレをやってるらしい。

おかげでクラス一の力持ちでもある。

欠点があるとすれば球技がダメなものと女タラシなところぐらいだな。

そんな奴と俺がなんで一緒に普通に話してるかって？

理由は簡単。同じ部活だから。

それ以外こんな目立つ奴との接点なんてどこにもないよ。

「市川さあ、好きな人とかいないわけ？」

「今はいないかな、正直恋愛にあんま興味ないし」

これマジな話しな。モテないからそんなことを言ってるわけじゃないぞ。

「とか言って三ヶ月まえに佐野に告って振られたクセに」

「なっ！！ うっせえ。近くにアイツいるのにデカイこえでそのこと喋るなよ」

そうしたら航が近くに座ってた佐野本人に向かって『なあ、お前って市川に……』って話しかけ始めやがった。あの野郎！！

「おいタラシ！！ やめろって言ってんだろっが」

航に向かつて裏拳をお見舞いしようとするが、手で軽く受け止められ、足払いを掛けられて床に倒れ、そしてお返しとばかりに四の字固めを……って

「あつ、ちよつとマジで？ 本気でやってないからそう怒らないギヤアアアアアア！！」

「大丈夫だ。俺は別の起こって怒ってないから」

「そういう問題じゃなくてだな。って痛いからああああ！！ 折れる折れる折れる！！」

俺は必死にタップするが、航はそんなのお構い無しな様子で。どんどん手加減がなくなっていくてます。佐野に視線を送っても『

程々にね』と言いながら苦笑するだけ。

佐野、あんたこれをお友達同士のじゃれあいと勘違いしてんだろ。こっちは肉体的に限界が来そうだったのに。

そんなところに誰かが割り込んできて、航を難なく俺から引き剥がした。

「矢野お、マジで助かった」

「おい矢野、空気読めねえな」

「いやー悪い悪い、手が滑ってな」

今、俺を死の淵から救い上げてくれた男は 矢野^{やの} 岳^{たける}。
同じ水泳部員であり、高1にして、将来はオリンピックにでれるのでは？ と噂される水泳部の若きエース。
俺の裏面を知る唯一の友達でもある。

「海原、一体何があってこいつに四の字固めをお見舞いしてたんだ？」

「まあノリでかな。その場の空気ってやつ？ 周囲のやつらが、『市川に四の字固めしろ』って空気を作ってたから」

「なにその空気！？ なんて限定的なんだ！！」

「ツツコミどころが違う気がする」

ん？他に突っ込むところなんてあったか？

「こいつ喜んでたし、DMだからいいだろ」

「ああ、そういやそうだったな」

「お前等、俺をどんな目で見てるんだ？」

「変態だ！！」

先に言っておく。俺は断じて変態ではない！！ これからなんと言われようが気にするな。

そんな感じで俺等がバカをやっていると、教室に男子達がやってき

た。

「おい、航。バスケやるって言ってから何分経ってんだよ」

「早くしないと昼休み終わるだろ」

校内でも人気の高い男子達がやってきたことで、クラス中の人達がそこに注目してる。

一部の女子なんかは頬を赤らめてやがる。

ホント、人気者って凄いよな。

航は自分もその中に含まれていることを知らないらしく、『人気者は大変だな』なんて言って笑ってる。

「そっぴゃすっぴかり忘れてたわ。今いくよ」

「早くしろよなあ」

「うい。了解」

あつ、行くんだ。球技苦手なのに。

航がバスケに参加することがわかったと、男子達は教室を出て行っちゃった。

忙しそうで羨ましいな。全く、俺は万年暇人だったのに。

「あつ、そっぴゃお前達もバスケやる？」

「いいや、俺達は遠慮しとくよ。足手まといになるのは御免だしな」

「ん？そっぴゃあ？まあ、ムリにとは言わねえけどさ」

そっぴゃいうと航は教室を後にした。

すまん、航。お前の優しさには感謝してるよ。ホントに。

「おーい海原あ！！」

廊下に向けて大声で叫んだ。

「あん？」

おわっ！！まさかホントに戻ってくるとは。予想外だったぜ。
「なんだよ？用事でもあんのか？」

「いやっ、その、あれだ」

「なんだよ。ハッキリしないな」

「ありがとな」

「ハッ？それだけ？」

「お、おう」

「お前に言われると笑いが込み上げるわ。キモチワルイ」
そう言い残して航は再び俺の前から去っていった。

宣言撤回だ。手前えになんか絶対感謝するかよ。この女タラシが
あ！！

「んで市川さあ」

「ん？どうした岳ちゃん」

「なんで俺の分までバスケするの断ったのさ」
そんなの決まってるじゃないか。

「俺が一人になると寂しいから」

「そうか、とりあえず死ね」

「いいじゃん別に。そこまで強くないんだし」

お前はただの馬鹿力だろ。

「とりあえず死ね」

「そんなにバスケが大切か、クズ」

「とりあえず死ね」

「なあ岳よ。言葉のドッジボールが成立してないよ」

「おそらく成立してるぞ。お互いに暴言を吐くって言う言葉のド
ッジボール」

「っーかそれ以前にさあ。本当は言葉のキャッチボールなんです
けど。超ウケるわあ、このおっさん顔」

「市川、覚悟はいいか？」

岳がその言葉を言い終える前に、俺は廊下に飛び出していた。さあて、本日二度目の処刑タイムだ。

「待てよ、市川。時間掛かるだろ」

「そう怒らないで。た・け・る　くゝん」

「市川あー!!」

俺は全力で廊下を走りだした。

これが俺の日常。人の揚げ足とったりしながら毎日を無理やり充実させてる安い日常。

俺はこんな学園生活なんて望んでない。いつ何時でも勝手に面白いことが舞い込んでくるような、そんな忙しい毎日を俺は送りたい。一生思いでに残るような、最高に忙しい学園生活を。

それに必要な不可欠なのがパートナーだ。素顔を見ても俺のことを受け入れてくれるくらい心が広くて、どんなときでもハプニング満載な素敵なパートナーが。

第一話（後書き）

宜しければ感想等をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4358z/>

将校少女と机上のジョーカー

2011年12月19日16時47分発行